

マルコによる福音書 15 章 6 節～20 節

2019 年 1 月 31 日

古本 靖久

1、聖歌 141 番 「茨の冠 突き刺す道」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 95 ページ）

4、テキストの位置

今回は、イエス様がピラトから尋問を受ける場面でした。そのとき言い逃れをすることもなく、黙っているイエス様を見て、ピラトは次の行動に出ます。

それは囚人二人を並べて、一人を釈放するというものでした。つまりこの時点で、イエス様の有罪判決は確定していたということです。

エルサレムにて	金曜日	15:1-5	ピラトの尋問
		15:6-15	バラバとイエス
		15:16-20	兵士の嘲弄
		15:21-32	十字架
		15:33-41	死
		15:42-47	墓
	日曜日	16:1-8	復活
		16:9～	結び

そしてついにピラトや祭司長、群衆たちはイエス様を十字架へと向かわせます。そこにはどのような思いがあったのでしょうか。

5、節ごとに

◆バラバとイエス

15:6 ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願い出る囚人を一人釈放していた（することになっていた）。

このような習慣があったことは、新約聖書のこの記事以外には見られません。というのも人々の思いにかかわらず、死刑をするかどうかの判断はすべて、ユダヤを統治していたピラトに任せられていたからです。統治されていた人々がピラトにそのようなことを願い出るといっても、奇妙な話です。

15:7 さて、暴動のとき人殺しをして投獄されて（つながれて）いた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。

ここでバラバという男が出てきます。マタイによる福音書では「バラバ・イエス」という名前で書かれ、「評判の囚人」という紹介がされています。またヨハネによる福音書には、バラバは強盗だと書かれています。

彼の本名が「イエス」なのかどうかについては、見解が分かれています。もともと彼の名前は「バラバ・イエス」だったけれども、後の写本家が「イエスがつくなど冒涇だ」と考えて削ってしまったというのが一つの考え方です。

もう一つの見解は、二人のイエスが捕まって暴徒の一人は釈放されたが、キリストであるイエスの方は十字架につけられてしまったというほうが劇的だから、バラバの名前もイエスにしてしまったというものです。

真実はわかりませんが、神さまの愛を伝えていたイエス様と違い、バラバは暴徒、つまり革命や反乱を起こそうとしたり、人々を暴力へと先導したりする人物でした。

15:8 （そして）群衆が押しかけて（上って）来て、いつものようにしてほしいと要求し（願い）始めた。

ピラトのいる総督官邸は、エルサレムの丘の高台にあったようです。群衆はそこにこぞって上ってきました。この「群衆」と、11章8節でイエス様のエルサレム入城を喜び迎えた「多くの人」とは同じ人たちなのでしょうか。

この時点で、群衆がピラトに申し出たことは、「いつものように囚人を一人釈放してくれ」ということだけです。それがバラバなのかイエス様なのかは書かれていません。

15:9 そこで、ピラトは（彼らに答えて）、「（あなたたちは）あのユダヤ人の王を釈放してほしいのか」と言った。

ピラトのこの言葉は、群衆がイエス様を釈放してほしいと願っていると思っただけのことでしょう。

もしここで群衆が「そうだ」と答えていたら、イエス様は釈放されたのでしょうか。ピラトにとって、イエス様は絶対に十字架につけなければならない人物ではなかったようです。

15:10 (というのも彼は、) 祭司長たちがイエス(彼)を引き渡したのは、ねたみのためだと分かって(知って)いたからである。

ここで「妬み」という言葉が出てきます。「妬み」とは、他人を羨ましく思い、その分だけ憎らしいと思う感情のことだそうです。イエス様はガリラヤで伝道を開始してからというもの、群衆の心をつかんでいきました。

きっと宗教指導者たちは、その姿が羨ましかったのでしょう。そこで「自分たちも同じように行動しよう」としていたら、結果は違ったと思います。しかし彼らはイエス様を憎み、ピラトに引き渡したのです。ピラトはそのことに気づいていました。

15:11 (しかし) 祭司長たちは、バラバの方を(彼らに)釈放してもらうように群衆を扇動した。

10 節に続いて、「祭司長たち」が登場します。イエス様の十字架に対する責任が、彼ら祭司長にもあるということを強調しているようです。



ここで出てくる群衆が、イエス様を歓呼の中で迎え入れた人たちと同じかどうかはわかりません。もし同じだとしても、エルサレムに入ってから一週間も経っていないとはどこにも書かれていません。いずれにせよ群衆は、バラバを釈放する方向に導かれます。

15:12 そこで、ピラトは改めて(再び答えて彼らに)、「それでは、ユダヤ人の王とお前たちが言っているあの者は、どうしてほしいのか」と言った。

群衆の望みがイエス様の釈放ではなかったことに、ピラトは戸惑いを見せたようにも思えます。「あなたたちはこの男をユダヤ人の王だと言っていたのではないか」、その言葉を聞くと、この群衆と「ホサナ」と叫んだ群衆は同一のようにも思えます。

ピラトは総督ですから、イエス様を自由に釈放することもできたでしょう。しかし祭司長たちに扇動された群衆の様子を見て、その意向を無視することはできないと感じたのかもしれない。

15:13 (すると) 群衆(彼ら)はまた叫んだ。「十字架につけろ。」

一度目は「バラバを」と叫んだ群衆は、今度は「十字架につけろ」と叫びます。ついこの間、「自分たちの王」だとイエス様を迎え入れた彼らが、ついにイエス様を死に至らせるのです。

15:14 (そこで) ピラトは(彼らに)言った。「(彼が) いったいどんな悪事を働いたというのか。」(しかし) 群衆(彼ら)はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び立てた。

ピラトは、イエス様は無罪ではないかと主張しているようです。ニケヤ信経を唱えるときに、このことも少し心に留めておきたいものです。

しかし群衆の叫びはますます激しくなります。「群集心理」という言葉がありますが、彼らにはもはや冷静に物事を判断する心がなくなってしまったのかもしれない。

15:15 (そこで) ピラトは群衆を満足させようと思って、(彼らに) バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

ピラトは群衆に迎合しました。群衆を喜ばせるためにバラバを釈放し、「悪事を働いていない」と思うイエス様を刑に処します。

ローマの市民権を持たない人が十字架刑に定められた場合、柱に縛り付けられ、骨や金属のついた革の鞭で打たれました。律法では人が受ける鞭打ちの数は40回が限度でした。ちなみにパウロは39回の鞭打ちを受けたことが五度あるそうです。鞭打たれたイエス様は、何の言葉も残さずに引き渡されていきます。

<前半の箇所から>

復活前主日の礼拝の中で、イエス様の受難の場面の劇をすることがあります。礼拝に参加しているそれぞれの人が、ピラトや祭司長など割り当てられた登場人物のセリフを言いながら、イエス様の受難を思い起こすのです。

その中で一番大きく響くのが、「十字架につけろ」という叫び声です。わたしたちがその場にいたら、群衆の一人として同じように声をあげてはいなかったでしょうか。

◆ 兵士の嘲弄

15:16 兵士たちは、(彼を) 官邸 (中庭)、すなわち総督官邸の中に、イエスを引いて行き、部隊の全員を呼び集めた。

ピラトは兵士たちに、イエス様を引き渡しました。総督官邸はエルサレムで祭りなどがあるときに、ピラトが滞在した屋敷です。その中庭に、兵士たちはイエス様を引いていきました。

そして部隊全員を呼び集めます。彼らは古代ローマの歩兵隊で、レギオンという大部隊の10分の1の規模だったようです。それでも200~600人という人数で構成されていました。イエス様一人に対してこれほどの人数を集めたということは、群衆の心がまた変わるかもしれないという恐れもあったのでしょう。

15:17 そして、イエス (彼) に紫の服 (衣) を着せ、(また) 茨の冠を編んで (彼に) かぶらせ、

兵士たちはイエス様に、彼らが来ていた深紅色の外套を着せます。その色は紫にも見えていました。紫は位の高い人が身につけていた色で、聖公会の主教さんのシャツの色も紫です。宗派によっては、お坊さんも紫は高僧しかつけられないそうです。



そしてさらに、茨で編んだ冠をかぶらせます。金の冠は、王の尊厳を示すしるしでした。それは特別な功績に対する勲章のようなもので、マカバイ記一10章20節にはアレキサンドロス王がヨナタンに紫の衣と金の王冠を送ったという記事が載せられています。

しかしイエス様の頭上にあっただのは、茨の冠でした。これによってイエス様は苦痛を受けます。それは身体的なものだけではなく、あざけりによる精神的なものもあったでしょう。

15:18 (そして彼に) 「(喜びあれ) ユダヤ人 (たち) の王、万歳」と言って敬礼 (あいさつ) し始めた。

兵士たちのあざけりは止まりません。「喜びあれ、ユダヤ人たちの王」という言葉は、通常「喜びあれ、カイサルに」と呼びかけられているものでした。まるでパロディーです。

15:19 また（そして）何度も、葦の棒で（彼の）頭をたたき、唾を吐きかけ、ひざまずいて拝んだりした。

マルコ 10 章 33～34 節では、イエス様はこのような言葉を語られました。

人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。

さらにイザヤ書 50 章 6 節にはこのような預言があります。

打とうとする者には背中をまかせ ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。

イエス様の予告、そして旧約聖書の預言は成就したのです。

15:20 このように（そして）イエス（彼）を侮辱（嘲弄）したあげく、紫の服を脱がせて裸（彼）の服を着せた。そして（彼らは）、十字架につけるために（彼を）外へ引き出した。

処刑は市外でおこなうというのが、ユダヤとローマの慣習でした。イエス様はついに外に引き出されていきます。

<後半の箇所から>

イエス様は何度も侮辱されます。前回は 14 章 65 節で「ある者はイエスに唾を吐きかけ、目隠しをしてこぶしで殴りつけ、『言い当ててみろ』と言い始めた。また、下役たちは、イエスを平手で打った」とありました。これ以降も二度、侮辱されます。

マルコ福音書が書かれた時代、イエス様を信じる人々は迫害されていました。信仰のために命を落とすこともあったでしょう。イエス様が受けられたように、あざけりや虐待を受けていた彼らは、イエス様の姿と自分たちとを容易に同一視できたのだと思います。

それではわたしたちはどうでしょうか。イエス様の姿を見て、どのような思いを持つでしょうか。イエス様の痛みや孤独が、わたしたちの心には届いているでしょうか。

今回の学びはこれで終わります。次回は 2 月 28 日(木)10 時半からです。「十字架」（マルコ 15：21～32）について学んでいきます。